

第一次大極殿院広場の調査

—第520次

調査の概要 奈良文化財研究所では、第2次調査（1959年）以来、第一次大極殿院の調査を継続的におこなってきた。今回の調査区は第72次調査（1971年）と第217次調査（1990年）の両調査区に挟まれた場所に位置し、調査面積は東西34m、南北14mの476m²である。調査は2014年1月7日に開始し、3月18日に終了した。詳細は『紀要2015』において報告することとし、ここでは概要を述べたい。

調査の成果 今回の調査では、奈良時代前半、後半、平安時代初期以降の3時期の遺構を検出した。主な遺構は奈良時代後半・平安時代初期以降のもので、礫敷広場、掘立柱建物、棟敷風の遺構と解釈してきたSB7141の延長部分、凝灰岩の石敷列、土坑などを検出した。また排水溝の断面などで、奈良時代前半の第一次大極殿院の礫敷や南北通路の西側溝を確認した。

特筆すべき遺構はSB7141で、奈良時代後半（西宮）の時期の遺構とみられ、今回の調査で新たに各列4基、計8基を検出した。柱穴は東西約3.0m、南北約1.0～1.2m

の楕円形で、柱間寸法は約6.0m（20尺）等間。それぞれの柱穴に3本の抜取穴を確認した。

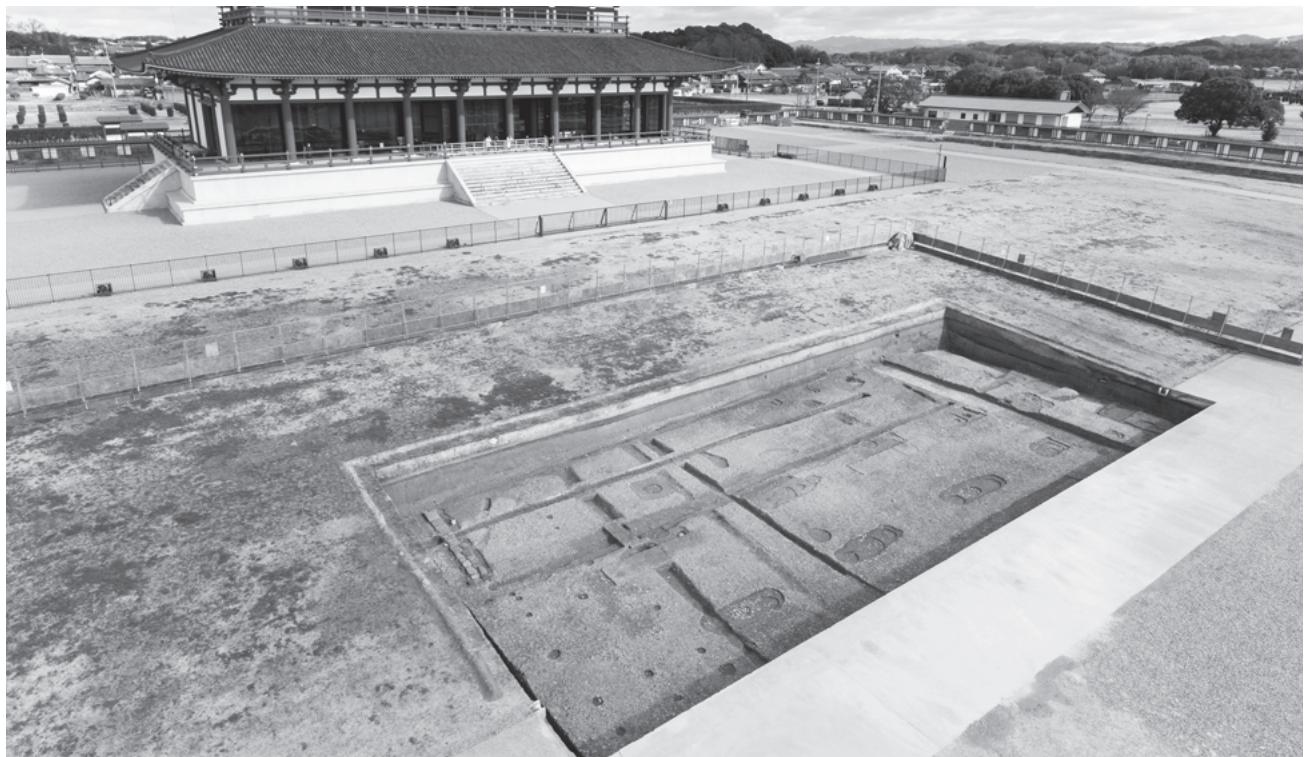
今回の調査で、南北の柱穴列で、掘方や抜取穴ともに埋土や規模が異なることを確認した。柱穴の形状は平城宮第二次大極殿院や長岡宮大極殿前庭で検出された、幢旗と推定されている遺構と共通点が多い。

また『延喜式』には、元日朝賀の際に、3本の宝幢と四神旗、計7本の幢と旗（幡）（以下、幢旗とする。）を、「二丈」（6m）の間隔で立てるとされており、今回の調査で検出した遺構と数、間隔と一致する。さらに「文安御即位調度之図」（12世紀頃）に描かれた幢旗は、中央柱の両脇に2本の脇柱を持つ構造で、今回、検出した3本の抜取穴と特徴を同じくする。

以上を総合的に判断すると、SB7141は棟敷風の遺構ではなく、時期を異にする2列に並ぶ幢旗の遺構の可能性が高いと考えられる。

今回の調査により、奈良時代後半の西宮において、重要な儀式に幢旗が用いられたことが考古学的に裏付けられた。これらの成果は平城宮の中枢部のみならず、古代の儀式空間の実態を解明する上で、重要な手がかりとなる。

（海野 聰）



図III-16 第520次調査区全景（南西から）